

たろばな 京都大学女性研究者支援センター Center for Women Researchers

ジュニアキャンパス 2009

日時 平成21年9月26日 14:15～15:45
場所 京都大学女性研究者支援センター

女性研究者支援センターでは、今年度のジュニアキャンパスでも、昨年度に引き続き、中学生向けゼミ「大学生と語るジェンダー」を提供しました。

このゼミには、男女合わせて6名の中学生が参加しました。また講師は、前期にポケットゼミ「ジェンダーと科学」を受講した1回生の学生が担当しました。まず、参加者・講師がそれぞれ自己紹介したあと、『ジェンダー』について講師から説明を受けました。そのあと、参加者と講師を2つのグループに分け、1つのグループにはテレビ番組を紹介する雑誌を、またもう1つのグループには、写真週刊誌を渡し、掲載されている人物の写真を、手で切り抜きました。これを模造紙に男女別に貼り付けていき、それぞれのグループの雑誌について、男女の比率、取り上げ方の違いなど、気づいたことを思い思いに発言していき、その後、全員で2誌



を比較しながら、一致する点や相違する点について意見を出し合いました。

ゼミの後半は、「アンパンマン」のキャラクター紹介ビデオを見ながら、名前の一部が共通するキャラクターは性別が同じであることや、男女共、特徴的な描かれ方をしていることなどについて考えました。そのあと、中学生が大学生の生活や授業についての質問を自由にして、最後にゼミを受講した感想などをアンケートに回答してもらいました。

中学生と比較的年齢の近い学生が講師役だったので、参加者も気軽に話しかけ、和気あいあいとジェンダー（「男らしさ」「女らしさ」とはなにか、どんな問題があるかなど）について、話し合うことができました。以下に感想のいくつかを紹介します。

＊日常、あまり『性別』を意識して雑誌やキャラクターを見たことがなかったが、意外とたくさんの特徴があって楽しかった。

＊日本では社会的性別の考え方ができていて、今から簡単にその考え方を変えるのは難しい。また、その考え方が、テレビなどのメディアによって刷り込まれている。

＊自分の母親は働いているので、他の参加者も同じだと思っていたが、違うと聞いてびっくりした。また、基本的には家では一番母親がえらいので男尊女卑はあまり感じていなかったのが先ほど同様びっくりした。

＊ジェンダーを考える時に、一般に売っている雑誌を使うとは思ってもいなかった。やり方も新鮮でよかった。



お知らせ

シンポジウム「研究者になる！」 11月6日（金）16:00から18:00 場所：吉田南総合館東棟 共東41講義室

大学だからこそなれる「ごみ研究者」
新米ママ、実験系研究室を運営する
独自性を求めて

浅利 美鈴（京都大学環境保全センター助教）
松下 祥子（日本大学文理学部物理生命システム科学科准教授）
田邊 玲子（京都大学人間・環境学研究科教授）

参加希望の方は11月5日までに、申し込んでください。

女性のための相談室 開室日

11月5日、13日、19日、27日

12月4日、11日、18日、25日

1月8日、15日、22日、29日

出前講義「自然淘汰と適応進化」

9月26日(土) 奈良県西大和学園にて
理学研究科・助教 野口順子

奈良にある私立西大和学園は、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業の指定を受け、その一環として研究者や開発者による講義を年に10回開講している。その中に女性研究者による講義も含めるために、支援センターに女性研究者の紹介をお願いしている。私はその3年目の3人目で、高校1年生を主たる対象者として、科学の紹介と興味付けを目的とした話をしてほしいという依頼を受けた。

私が目下最も興味を持ち研究しているのは、「進化」である。進化は総合的な学問であり、生物学の最後に出てくるのが常ではあるが、私達の周りにいる生き物の多様さは、中学生にでも身近に認識できる現象である。ここを導入口に「自然淘汰と適応進化」という題目で、適応進化とはどのようなことなのか、そして、適応進化する過程でどのように自然淘汰が作用するのかを、話すことにした。話は、自然淘汰をフィールドで最も明快に証明した、Grant 教授夫妻らが30年以上に渡って調査した、ガラパゴス諸島に住むダーウィンフィンチという鳥に関する研究例と、私が研究をしている植物のユウスゲの夜咲性の進化に関する研究例を話し、この2つの共通点を説明し、重要なポイントを整理しまとめとした。講義は、まず Grant 教授夫妻は、なぜ研究調査地としてガラパゴス諸島を選んだのか、そして、なぜダーウィンフィンチを研究材料としたのかなど、ステップステップで、疑問を投げかけ、質問をし、考えながら進んでゆく形で講義を進めた。1人の男子生徒はそのほとんどの質問に対して、直に反応し手を挙げ、答えてきた。私は、他の生徒達がどれほど理解しているのか、彼に圧倒されているのではと少し心配をした。しかし、講義の後、直に行われるアンケートへの参加生徒達の回答を読み、それは

全くの危機であったことが分かった。また、同じ講義を聞いてその受け止めかたの多様さに、私は興味を持つと共に、彼らに頼もしさを感じた。その回答のいくつかを紹介すると、「自分でも新しい種の違いなどを発見してみたいです」、「人の心理とかにも通じるかもしれないと思いました」、「生物という学問の新たな切り口を見れたと思う。自分の興味のある事を学ぶときに、その切り口を変えるとさらにおもしろいかもしれないと思った。どんな分野においてもさまざまな角度から考えられるようになるう」。また、「生物学は覚えるものではないと知り、これからの学習につなげたいと思いました」。これは今回の私の講義の1つのメッセージでもあったので、このような反応が返ってきてほっとしている。



第2回 京都大学優秀女性研究者賞「たちばな賞」応募者募集

第2回
京都大学
優秀女性研究者賞
「たちばな賞」
応募者募集

この賞は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することにより、その研究意欲を高め、もって将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成等に資するために創設されました。

＜受賞条件＞
本学に所属する女性研究者（ポスドク及び日本学術振興会特別研究員を含む）及び女子院生のうち、学術上優れた研究成果を挙げたと認められる者（平成22年3月31日時点において39歳以下）。

【学生部門】推薦受付締切時、大学院博士後期課程に在学中であること
【研究者部門】博士の学位を取得（博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含む）していること

＜推薦＞ 推薦による応募のみです。

(1) 推薦権者は優れた研究実績を有する本学に所属する研究者とします。
(2) 推薦部局において各部門内に候補者が複数名いる場合は、各部局で【学生部門】と【研究者部門】毎に順位を付して推薦してください。

＜顕彰＞
受賞者は各部門1名ずつとし、賞状と記念品を授与します。

詳しくは、センターホームページをご覧ください。

本賞は、優れた研究成果を挙げた本学の若手女性研究者を顕彰することによりその研究意欲を高め、もって将来の学術研究を担う優秀な女性研究者の育成等に資するために創設されました。

＜受賞条件＞

本学に所属する女性研究者（ポスドク及び日本学術振興会特別研究員を含む）及び女子院生のうち、学術上優れた研究成果を挙げたと認められる者（平成22年3月31日時点において39歳以下）。

【学生部門】推薦受付締切時、大学院博士後期課程に在学中であること

【研究者部門】博士の学位を取得（博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含む）していること

＜推薦＞ 推薦による応募のみです。

(1) 推薦権者は優れた研究実績を有する本学に所属する研究者とします。

(2) 推薦部局において各部門内に候補者が複数名いる場合は、各部局で【学生部門】と【研究者部門】毎に順位を付して推薦してください。

＜顕彰＞

受賞者は各部門1名ずつとし、賞状と記念品を授与します。

詳しくは、センターホームページをご覧ください。

女性研究者養成システム改革加速事業

本事業は、多様な人材の養成・確保および男女共同参画の推進の観点から、特に女性研究者の採用割合等が低い分野である、工学系、理学系、農学系の研究を行う優れた女性研究者の養成を加速する必要性に基づきスタートした、文部科学省科学技術振興調整費事業の一つです。本事業を実施し、機関におけるシステム改革に効果的な分野・規模で当該女性研究者の採用を行うことにより、人材の多様化、研究の活性化および男女共同参画意識の醸成、さらには、機関として本来取り組まなければならない柔軟な組織編成や環境整備等を同時に促進し、総合的なシステム改革の構築を目指すものです。

平成21年度に、京都大学が提案した「京大式女性研究者養成コーディネートプラン」を含む5課題が採択されました。

概要

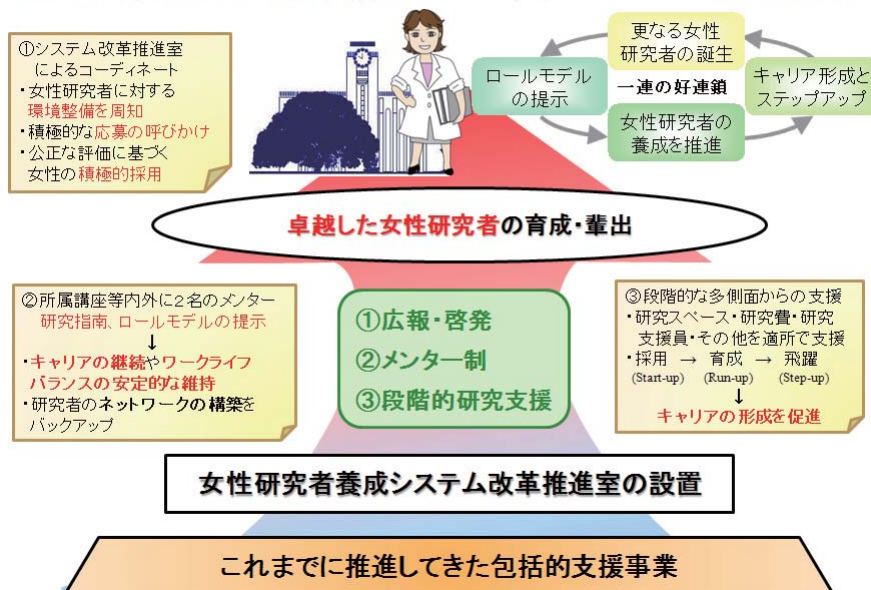
京都大学は、世界でも有数の知の拠点であり、多様な人材の育成という観点からも、女性研究者の活躍促進は喫緊の課題です。それを踏まえ本課題では、女性研究者の採用・育成のコーディネート等を担う「女性研究者養成システム改革推進室」の設置を皮切りに、新規養成女性研究者へのワークライフバランス等に関するソフトな支援から、研究活動に根ざした段階的支援を実施し、育成を図ります。本システム改革自身は、女性研究者の参画、採用促進等の広告塔となることで、学内の意識啓発や次世代を担う女性研究者の裾野開拓・拡大、その結果、更なる女性研究者の輩出という一連の好連鎖を生み出し、アカデミア全体の知力の底上げに寄与することが期待されます。

研究スキルアップ経費の募集

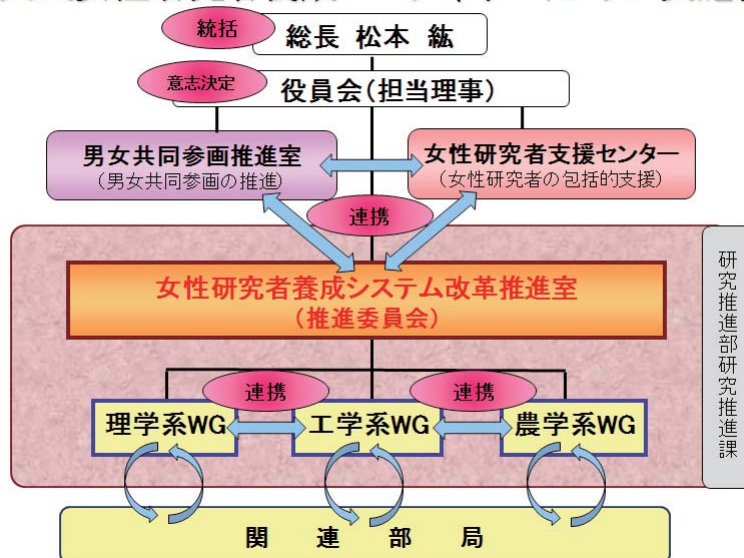
本事業では、理学系・工学系・農学系の研究を行う優れた女性研究者の養成を加速するため、当該分野に在籍する女性教員を対象に、研究のスキルアップに資する経費を支援します。

国際学会や国際シンポジウム等での発表を目的に参加するための経費や、論文投稿の際の英文校閲経費として使用できます。

京大式女性研究者養成コーディネートプラン実施内容



京大式女性研究者養成コーディネートプラン実施体制



公募期間

(1) 国際学会等

第一次募集：平成21年8月19日（水曜日）～平成21年9月18日（金曜日）

第二次募集：平成21年11月16日（月曜日）～平成21年12月11日（金曜日）

(2) 英文校閲

最初の募集は国際学会等の第一次募集と同じ日程で行いましたが、今後も随時応募を受け付けます。ただし、申請状況によって年度の途中で応募の受付を打ち切ることがあります。

詳しくは下記URLをご覧ください。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news_data/h/h1/news5/2009/ku_internal/091211_1.htm

連載：研究者になる！－第20回－

物質・細胞統合システム拠点 (iCeMS)・教授 原田慶恵



私の研究室で行っている研究は、生体内で重要な働きをしているタンパク質分子や、DNA 分子の働く仕組みを明らかにすることを目的としている。蛍光色素やプラスチックのマイクロビーズなどを目印に、1 分子のタンパク質や 1 本の DNA を光学顕微鏡で観察する“1 分子

イメージング”という技術や、1 本の DNA やタンパク質分子を顕微鏡下で観察しながら光や磁石を使ったピンセットを使って操作する“1 分子操作”という技術を使うのが我々の研究の特徴である。これらの研究手法のものは、私が 1992 年から 5 年間所属していた研究プロジェクトで、研究仲間と開発したものである。このような手法を使った研究は、「生物物理」という研究分野の研究者によって行われている。「生物物理」は日本では約 50 年前に、物理学の研究者が生物を研究対象とすることで始まった研究分野である。以下、私が紆余曲折の末に「生物物理」の研究者になった経緯を紹介する。

私は子供の頃から理科好きだった。これは母親の影響が大きかったと思う。昭和 7 年生まれの母は小学校、女学校時代は、戦中戦後の非常に大変な時代で勉強どころではなかったそうである。自分が満身に勉強できなかったことを残念に思っていたせいか、子供の教育には熱心だった。といっても「勉強しなさい」というのとは違って、魚屋のゴミ捨て場からウジ虫をとってきてそれを牛乳びんに入れて飼ったり、朝顔の“つる”を反対巻きにしてその後どうなるかやってみたり、私と姉を巻き込んで実験や観察みたいなことをやるのである。私はこのような母の誘導(?)により、しだいに理科好きになっていった。高校では他の教科はまるでだめだったが、生物だけはまああの成績だった。そこで、大学は理学部生物学科に進学することにした。将来のことなどまるで考えていなかったからこそその進路の決定だった。どうにか茨城大学に合格し、父親の知人宅に挨拶に伺ったとき、「うらやましいなあ。僕も物理学科に進みたかったんだけど、物理や生物では就職できないからあきらめたよ」と言われたことを印象深く覚えている。

当時は今のように“バイオ”の時代ではなく大学卒業後、同級生の多くはコンピューター会社に就職していくような状況だった。大学 4 年生の時に“ゾウリムシ”の研究をしている研究室で卒業研究を行った。大学卒業後、

もう少し“ゾウリムシ”相手に実験を続けたくて、開設後 4 年しか経っていない大学院修士課程に進学した。茨城大学には大学院博士課程がなかったので、修士終了後は就職するつもりだった。ところが、今ならありえないことだと思うが、就職活動をいつからどのようにしたらよいかわからないまま修士 2 年生の秋になってしまったのである。

ちょうどその頃、ゾウリムシなどの原生動物の研究をしている人が集う学会が開催され、懇親会で修士修了後の行く先がなくて困っていること周りの人に話したら、大阪大学の先生が「うちの博士課程にこないか」と声をかけてくださった。当時は異なる大学から博士課程に進学するということは、基本的にできなかったし、もしそれができるとしても難しい筆記試験を受ける必要があった。筆記試験があったらたぶん不合格だったと思うが、大阪大学基礎工学部は修士過程での研究を発表するだけでよかったので合格させてもらえた。大阪大学でも研究対象はそのまま“ゾウリムシ”だった。ゾウリムシは単細胞なのだがこの 1 個の細胞が 1 個体と同じ複雑な機能を持っている。実験対象として、とても難しい生き物で、研究はなかなか進まなかった。あっという間に 1 年半以上が過ぎ、このままでは博士号もとれないし、困ったなあと途方に暮れていた。

そのころ、同じ研究室の別の先生が筋肉タンパク質の線維を蛍光色素で標識して光学顕微鏡で観察することに成功した。この実験に非常に興味を持ち、思い切ってゾウリムシの研究をやめて、その先生の元で研究を始めることにした。研究テーマを博士課程 2 年の終わり頃に変えるのは、今考えると無謀なことだが、当時は無我夢中だった。蛍光標識筋肉タンパク質線維を使って、光学顕微鏡下で筋収縮と同じ現象を再現するアッセイシステムを完成させ、それを使って行った研究成果が幸運にも Nature 誌に掲載された。1 年遅れで博士号を取得し、難関だった日本学術振興会の特別研究員にも採用された。ここまでできたら研究者としての道を進んでいくしかない、という状況に追い込まれ、今の私がある。

地方大学出身で女性の私がここまでこれたのは、“生物物理”という研究分野の懐の広さと、お世話になった先生や先輩、研究仲間のおかげである。両親が私に干渉せず自由にさせてくれたことも非常にありがたかった。これからも、楽しく研究を続けていきたいと思っている。昨今“多様性”の重要性が言われているが、自分言うのもなんだが、まさしく私が研究者集団に多様性を与える貴重な存在なのではないかと思っている。

Center for Women Researchers

〒 606-8303 京都市左京区吉田橘町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>